hide FILM ALIVE!!

hideライブの醍醐味とは? hideが発信するエンターテイメントの世界とは?
当時、数々のステージを体感しhideとも交友の深かったライターにエピソードを交えて語ってもらった。

hide 1st solo tour
『HIDE OUR PSYCHOMMUNITY ～hideの部屋へようこそ～』

1994 / 3 / 16 ～ 5 / 11　全12会場 16公演

もう17年以上前のこと。

初めてのソロツアーを前に、hideはフル回転していた。バンドのメンバー選び、セットリスト作りはもちろん、セット・デザインや演出アイデアから物販のアイテムまで、とにかくツアーに関わるすべての事にコミットするから、時間がいくらあっても足りない日々が続いていた。が、寝る暇もないくらい忙しいのに、とても楽しそうだった。

hideの頭の中でずっとグルグル回っている心配があった。それはボーカリストとしてステージに立つこと。X JAPANのギタリストとしては、長時間のライブを数え切れないほど経験してきた。ボーカルの経験もある。だが、ワンステージ丸々、メイン・ボーカルを務めたことはない。ミュージシャンとしては最大級のプレッシャーを抱えながら、hideはツアーにまつわる難問を次々に解決していった。

hideにはそんなプレッシャーに負けない理由があった。ボーカリストについては自分の問題なので、自分にしか解決できないことをよく知っているから絶対に不安を外に出さない。ツアーのプランニングに関しては、hide自身がいちばん楽しみにしているから、どんな困難に出くわしてもギブアップするわけがない。

こんなことがあった。ツアーリハーサル真っ最中のある日、休憩時間に物販スタッフがhideの膨大な注文をクリアしたアイテムを持ってきた。確か、タオルだったと思う。出来上がった製品を見てhideも満足し、スタッフがホッとした矢先、hideがポツリとつぶやいた。「もう少し安くならないかな」。ぎりぎり頑張ったスタッフの目が、点になる。「でもhideさんの注文を全部実現すると、これ以上安くするのは無理です」。と、hideは「そんなこと言わないで、やってみてよ」と言い残してリハに戻っていった。

まだツアーが始まってもいないのに、hideの目には胸を高鳴らせてライブ会場にやってくるファンの様子が、見えているのだと思った。彼のライブは、オーディエンスが家を出たところから始まっている。会場に一歩足を踏み入れたら、もうそれは開演したのと同じこと。コンサートホールのロビーにもデコレーションが施してあり、中でも物販ブースはファンたちが夢を膨らませる重要なポイントなのだ。それを知っているから、hideは少々の無理なら通してしまう。スタッフも困りながら笑って対応している。そう、hideは自分が一ファンとしてライブに行ったときの気持ちを忘れていないのだ。自分のライブに、“少年・松本秀人”が遊びに来ることを考えて、すべての準備を進めていたのだった。

「絶対にチケット代以上、楽しんでもらう」。これがhideが一貫して掲げた最大のテーマ。その意味で言えば、このフィルムライブの見所は、スクリーンの隅々にまである。目を凝らしてみれば、演奏していない瞬間でも、ステージの隅っこであっても、オーディエンスを楽しませようというhideの心意気をあちこちに発見できる。hideはライブのメインアクターである以前に、みんなと楽しみたい“ひとりのオーディエンス”なのだ。

hideが挑んだのは、“誰も見たことのないhideのライブ“だった。先入観も前例もゼロなのだから、何でもありといえば何でもあり。だが、それだけにイメージを練り上げるのは非常に難しい。なにせhide本人さえも見たことのないライブを作るのだ。そしてhideは、大方の予想を見事に裏切ってくれた。なんとライブの１曲目は、ギターを持たずに、ハンドマイクで歌う。誰がそんなオープニングを想像しただろうか。この思い切った幕開けのおかげで、hideは最大限の自由を獲得した。そればかりでなく、立体的なセット、あるいはロボットのようなアクションなど、こちらの想像を遥かに超えたライブを見せてくれた。なんの前触れもなしにこんなパフォーマンスを見せられては、実際に会場にいた人でなくとも充分にエキサイトしてしまう。

きっとこのフィルムライブにきてくださった人の中には、X JAPANのhideではなく、ソロアーティストとしてのhideしか知らない人も多いと思う。そういう人にとっては、以前との比較はあまり意味のないことだろう。が、そんな人にとってもイリュージョンと見まがうほどスリリングで大規模な演出には素直に驚かされるだろう。だが、[HIDE OUR PSYCHOMMUNITY]はhideにとって最初のツアーだという事実をもう一度、考えてみてほしい。そうすれば、彼のトータルプロデュース能力の高さが飛び抜けていることを分かっていただけると思う。また、今活躍している若手バンドの多くが、hideのライブに大きな影響を受けたと公言していることも納得できる。

実際、このフィルムで見る「TELL ME」は、まったく古びていない。それどころか、今もhideの残した大切なメッセージを、新鮮なものとして伝えてくれる。スリルと興奮のステージの最後にこの歌が流れてくると、心が解放されていくのが実感される。今もhideがそこにいるようだ。同時に、僕の隣には“松本少年”がニコニコ笑いながらスクリーンを見つめているのを感じる。

さあ、みなさん、心ゆくまでhideのライブを楽しんでください。初めてソロのステージに立つhideは、初めて彼のライブを見るあなたと同じくらいわくわくして光の中に現われる。そしてこのライブは、そのまま傑作アルバム『Ja,Zoo』へ至る道の記念すべき最初の一歩となっている。

＜ライター：平 山　雄 一＞

hide 2nd solo tour
『PSYENCE A GO GO 』

1996 / 9 / 4 ～ 10 / 20　全13会場 18公演

永遠のロックスター。
僕にとってのhideはそうだし、同じことを思っている人は、きっとたくさんいるはずだ。

昔、こんなことを誰かが言っていた。「人気が3世代続けば永遠に続く」のだと。たとえばビートルズがそう。たとえばドラえもんがそう。リアルタイムで熱中した世代が語り継ぎ、次の世代が熱中する。それがもう一度繰り返されるなら、3世代目はそれをまったく新しいものとして認識しながら熱中するはずで、あとはもう無限ループのように永遠に続くのだという。

hideも間違いなくそうなるはずだ。実際、5月2日に毎年行なわれている“hide Memorial Day”に訪れるファンは、10代の比率がどんどん高くなってきているように見える。しかも、数年前まではその多くが親子連れだったが、今は、10代の子たちが同世代の友達と一緒に訪れるようになってきている。アンケートなどによると、hideのことを今まで知らなかったファンも実際に多いという。そのファンたちは、きっと次の世代に語り継ぐことだろう。なぜなら、hideのコンサートは、何年も経った今も鮮度を失うことなく、世代を越えて楽しく、そして共鳴できるものだからだ。

ここではそのhideのセカンドソロツアーについて少し触れよう。これから初めて観る人も多いはずだから、ここでライブレポートのように細かく書くことはしないが、大きく振り返ると、ファーストソロツアー“HIDE OUR PSYCHOMMUNITY”はエンタテインメント性にあふれ、まるで遊園地にいるような楽しさだった。セカンドソロツアーに先駆けて行なわれた千葉マリンスタジアムでの“indian Summer Special”は、まさに何でもあり状態で、まるでアミューズメントパークにいるような楽しさだった。そしてセカンドソロツアー“PSYENCE A GO GO”は、ファンとメンバーが一体となってステージを作り上げる、今で言うSNSのような双方向的な楽しさにあふれていた。

hideはやんちゃなロックスターであると同時に、とってもファン想いで、そしてたぶん、とっても寂しがり屋だった。だからこそ、みんなの気持ちがわかり、みんなを楽しませたい、みんなを元気にさせたいと、人一倍強く思っていたんだと思う。

こんなエピソードもある。まだまだロックが不良のものと思われていた時代、X JAPANが紅白歌合戦に初めて出ることになり、hideはそれを喜んだという。「自分たちがお茶の間に認められれば、ファンの子たちも市民権を得られるんだ」。結果、実際にそうなった。ロックファンは、もう周囲から白い目で見られることはなくなった。hideはファンに、夢と希望と勇気を与えてくれたのだ。

ファーストソロツアーを終えたとき、セカンドソロツアーの構想について、hideはこう語っていた。「単純に、どこ行っても1日中ロックみたいなやつ。そういうまさに“PSYCHOMMUNITY”みたいなのを作っちゃおうかなと思ってる」

セカンドソロツアーは本当にそうなった。趣向が凝らされ緻密に練られつつも、その日の内容は当日の朝決めていたそうで、毎回何が起こるかわからない。だからファンは当日会場に入るまでもワクワクするし、入ったら入ったで、DJが大音量でロックを流していたり、未公開曲のビデオクリップが突然流れたり、その瞬間から楽しめるものになっていた。ステージが始まるときも、今日はhideがどう登場するのかと毎回ワクワクし、そしてその登場の仕方で必ずみんなをビックリさせた。ライブ中も、様々なギミックが仕掛けられ、ハプニングやアクシデントも含め、何が起こるかわからない（それはメンバーもそうだったはず！）。お客さんを何人もステージに上げたりもした。また、hideのコンサートにはアンコールという概念がなく、1部、2部と分かれていたのだが、転換の間も楽屋の様子をスクリーンで流し、決して飽きさせない。さらには、ステージが終わったかと思いきや、とんでもないどんでん返しがあったりも。約3時間の間、ファンを一瞬たりとも現実の世界に引き戻すことなく、夢の世界の中にい続けさせてくれたのだ。

ツアー最終日のMCでも言っていたが、雑誌等のアフターインタビューで必ず言っていたことがある。それは「またこの7人でやりたい」ということ。hideのその夢は、今も毎年、実現している。

「２年前、青い空なんか大嫌いだって言ってた僕が、青い空の雲の中に帰ります」
セカンドツアー最終日の最後に、hideはそうMCした。「また春に会いましょう」

青い空の雲の中から、みんなをまたビックリさせるために、みんなをまた幸せにするために、みんなにまた夢を見てもらうために、hideは毎年、春になるたび、みんなのもとに帰ってきてくれる。hideの音楽、hideのコンサート、そしてhideというロックスターの存在は、永遠に“to be continued”なのだ。

＜ライター：吉 田　幸 司＞